

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面も、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年3月9日(月)

強歩会を終えて

また一つ大きな行事が終わりました。私も久しぶりに43kmを歩き、爽やかな達成感と感動と同時に、激痛を味わいました。毎回歩き終えた後「もう、せんと」と心に誓ったのですが、何故か時期がくると「モヤモヤ」と感じることがあります。やはりあの感動を味わいたいのですね。強歩会の魅力について私はこう思います。「同じベクトルで同じ目標に向かって力を結集することによる爽快感」なのだ。

スポーツの世界でこの感覚を味わうには特別なスキルが必要になることがあります。例えばサッカーです。サッカーは個別のスキルが揃って組織として機能します。しかし、強歩会には特別なスキルは必要ありません。ただ、歩くだけです。それだけで、こんなにも大きな達成感と感動を味わうことができるのです。そう考えると、感動の種は身近にあるのではないのでしょうか。達成感や感動を味わいたいから何か特別なことをする...ではなく、ただ目の前の日常を仲間と一緒に過ごすだけでも、心地よい味わいがあるのでは。

強歩会 感想募集中!

先日の強歩会では大変お世話になりました。何人かの保護者の方から「感動した。」「とか「来年も参加します。」「等の声が聞かれ、嬉しく思っています。同じ方向に向かってみんなで協働することの楽しさが感じられた行事だったと思います。私の教え子達もサポーターとして参加させて頂きましたが、それぞれに「久しぶりの感動」を味わいましたと言っています。

この行事の良い所は、お金では買えない大きな宝物を得ることです。参加した人たちの達成感や充実感は言葉では言い表せません。そして、今回は参加したくても参加できなかった仲間がいることも忘れて欲しくありません。さて、行事は終わりましたが、振り返りは大変重要です。そこで、参加された児童、保護者の皆さんに感想を募集しています。既に多くの参加者から感想が寄せられており、途中の苦しさやゴールした時の達成感、仲間との貴重な時間等々についての文章は、読んでいて涙が出そうになるものばかりです。今後、「みんなの居場所」で紹介させて頂きますので、記念としてこの機会にご是非取り組んでみて下さい。



シリーズ「自分を語る」#802

熊本県国際課で仕事をさせて頂くことがあり、多くのことを経験してまいりました。最初の1週間は、ひたすら厚いファイルを読んだり、言われた事をやるだけの生活でした。1週間経たずには辞めたいくらいに感じたこともありました。先ずは、当時私が担当していた件の事業について少し紹介いたします。大きく分けて3つあります。①「熊本県留學生事業」の運用。②「熊本県海外技術研修員事業」の運用。③「自治体職員協力交流事業」の運用の3点です。

①「熊本県留學生事業」は読んで字の如く、熊本県が費用を負担して留學生を招き、将来熊本県との経済的・文化的な戦略的交流の架け橋となる人材の育成を目指すものです。主に、熊本県人会のある海外諸国の青年、例えば父母、祖父母が居住し、その母国で生活していた方を留學生として招き入れ、その生活マネージメントを行う業務でした。簡単に書いていますが、留學生受け入れ、生活のお世話、大学への打ち合わせ、帰国までの全ての業務を行うので、めまぐるしく状況が変化していきます。本当に訳が分かりませんでした。

②「熊本県海外技術研修員事業」は単純にめまぐるしく動きます。それは、研修期間が留學生よりも短く、研修内容が濃密で、それに加え、研修がスムーズに行えるように日本語の研修も必要になります。そういう意味で大変でした。

③「自治体職員協力交流事業」(GOTD)は、留學生や研修員と同じような業務ですが、事業の母体が「自治体国際化協会」という、東京に本部がある事業所です。そこは総務省の管轄で、自治体職員、つまりの諸外国の公務員を熊本県の公務員と交換留学のような形で研修や派遣をします。

簡単に3つの事業の取組を紹介しましたが、私ももちろん教師ですから、一般行政の経験がありません。ですから、国際課職員が言っている言葉の意味が分かりず、更に留學生や研修員の決定は、国際課職員による電話面談によって行います。面談及び候補者決定を行うのは新澤田です。おいおい...となっていたら...ってな感じです。職員の仕事も留學生や研修員の仕事も分かりず、何をしているか分からない状態でした。理由は仕事の大変さではなく、自分の理解の狭さでした。(汗)

4月10日頃でしたでしょうか、同じ「島」の職員から、澤田さん、今週出張だよ。と言われて、久しぶり外に出るなあ、ってホッとしていました。要項を見るのが場所は「クリア」となっていました。「あ、島島のクリアね」と話していたら、同じ島の職員が笑っています。よけよけ要項を見ても「クリア」(自治体国際化協会)となっていました。しかも、クリアで働く人たちはバリバリのキャリアで、殆ど人がハイリソールです。しかも、最低でも3ヶ国語話さないと人はかりです。同じ立場で参加していた人たちは、これまでハリバリの行政マンです。その中に放たれた迷える子羊澤田でした。しかも、この日は東京日帰りの、しかも春の風が吹き渡る、現場到着ギリギリでした。私はその帰りの飛行機の中では、すっかり落ち込んでいました。理由は仕事の大変さではなく、自分の理解の狭さでした。(汗)